

## 石川・加茂遺跡



(津幡)

- 1 所在地 石川県河北郡津幡町加茂・舟橋
- 2 調査期間 第四次調査 一九九四年（平6）四月～一二月
- 3 発掘機関 (社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 4 調査担当者 三浦純夫・藤田邦雄・浜崎悟司・柿田祐司
- 5 遺跡の種類 集落跡・道路跡
- 6 遺跡の年代 七世紀～一〇世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

加茂遺跡が所在する津幡町は金沢市の北に接し、その西側には河北湯が存在する。河北湯は、一九六三年（昭和三八）から干拓事業

が開始され、七〇年には干陸された。本遺跡は、この潟の東縁部の沖積地に立地しており、調査地点の標高は四・五m～四・八mを測る。

本遺跡は、一般国道八号津幡北バイパスの建設に先立つて、一九九一年より發

掘調査を開始し、一九九四年度までに四次の調査を数えている。

四次にわたる調査で検出された主要な遺構には、道路、掘立柱建物、井戸、土坑、大溝、小溝群、柵がある。掘立柱建物は約四〇棟検出されている。主な出土遺物には、墨書き土器（三〇〇点以上）や木簡、漆紙文書、帶金具、軒丸瓦、和同開珎銀錢がある。木簡は第一次調査で検出した道路から一点出土した。

道路遺構は調査区の中央部において、南東から北西に走行しており、約六〇mにわたって検出された。これは両側に二条ずつの側溝を備えており、新・旧二つの時期があることがわかった。主軸の方向は二時期ともN-27°Eである。古い時期の道路は、側溝の心々距離が約九mで、側溝から須恵器・土師器が出土している。側溝の埋没時期は八世紀末とみられる。新しい時期のものは、心々距離が約六mを測る。木簡はこの時期の西側溝肩部より出土している。側溝の埋没時期は一〇世紀初頭とみられる。

道路遺構の北半部に「落ち込み」と命名した遺構がある。これは道路側溝の埋没後に作られたと考えられ、「正月」と記した墨書き土器や斎串、木製の椀・皿が出土している。

なお、道路遺構は、その位置や規模からみて能登へ向かう北陸道の駅路（北陸道能登路）と考えられる。

### 8 木簡の釈文・内容

形状は完形ではないが、六つの断片をつなぎあわせることにより、ほぼ完形に近い形に復原できる。

機能面から分類するならば、この木簡は、啓の様式の文書様木簡である。作成者は、裏面の「□□造□主」であり、表面の「丈部安□」に対して送られ、廃棄されたものであろう。啓は、公式令に春宮坊あるいは中宮職が皇太子や三后に上申する時の文書の様式として規定されているが、実際にはそのような啓とは異なる官司や個人の上申文書としての啓も多く見られ、この木簡もこのような範疇の中で考えるべきものであろう。その場合、問題となるのは、第一にこの木簡の書出しが「謹啓」で、書止めが「以解」であることである。このような啓式と解式を混用した例は、「正倉院文書」にもしばしば見られ、当時においてはきわめて日常的に用いられた様式なのであろう。次に注意すべき点は、「謹啓」という書出しの直後に

(1)

・「謹啓 丈部安□」

□□消息後日参向而語

無礼状具注以解

七月十日 □□造□主】

(146+334)×33×5 011

(裏)



(表)



宛所として「丈部安□」という人名がくることである。この木簡の場合、宛所の「丈部安□」という人名に続く部分が欠損しており、その後にどのような文字が続くかは不明であるが、状や啓の様式を持つ古文書の宛所においては、先方の人名を表す言葉の下に「尊」「尊者」「尊公」「貴公」などの敬語が付けられること、さらに、それらの敬語の下に脇付として「前」「御前」などの言葉が添えられることを踏まえると、この木簡の欠損部分のうち、「丈部安□」の下には、「尊」あるいは「尊者」などの敬語が入り、その直下もしくは右下に脇付として、「前」もしくは「御前」などの語が付されたことが、一つの可能性として考えられるであろう。

この木簡が具体的にいかなる場面で使用されたかという問題については、今後検討すべき点が多い。分かち書きの右側の部分には「人給雜魚十五隻」を献上する旨が記されているが、平城宮跡出土

の木簡・墨書土器に見える「人給所」「人給」、平安時代の儀式書に見える「人給屋」などともあわせて考察されるべきであろう。また、分かち書きの左側の「□□消息後日参向而語□」〔奉か〕といふ文言からは、国司の部内巡行との関わりも想定できるが、当遺跡が越中国や能登国へとむかう交通の要衝に位置していることを踏まえると、この木簡の移動が、果たして、加賀地方の中だけで完結するものなのかは判断が難しい。これらの点について、今後考えを深めていく必要があると思われる。

## 9 関係文献

(社)石川県埋蔵文化財保存協会『石川県埋蔵文化財保存協会年報

六』(一九九五年)

三浦純夫「石川県津幡町加茂遺跡の道路遺構」(古代交通研究会第  
四回大会発表資料)一九九五年)

(1~7~9  
森田喜久男)



所在地 富山市豊田本町

2 調査期間 一九九五(平7)五月~七月

3 発掘機関 富山市教育委員会

4 調査担当者 堀沢祐一

5 遺跡の種類 祭祀遺跡

6 遺跡の年代 弥生時代・古墳時代・平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

豊田大塚遺跡は、富山市を中心部から北東方向約5kmに位置している。遺跡は、西側約1kmを流れる神通川によって形成された扇状

地の中にある微高地に立地し、標高9mを測る。

豊田大塚遺跡の調査は、

店舗建設に先立ち、一五〇

〇m<sup>2</sup>を対象として実施した。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて形成された沼・湧水点に関連する遺構と平安時代の